

I 研究の概要

1 研究主題

深く思考する「学び」を児童と共に醸成するⅡ

～ 算数科における対話型授業の創造 ～

2 主題・副題の設定の理由

(1) 本校の現状と求める子ども像・教育像

本校では、昨年度、校長ビジョンのスローガンである「自分から、みんなで、学びを楽しむ」を基に、対話に着目した研究を推進してきた。

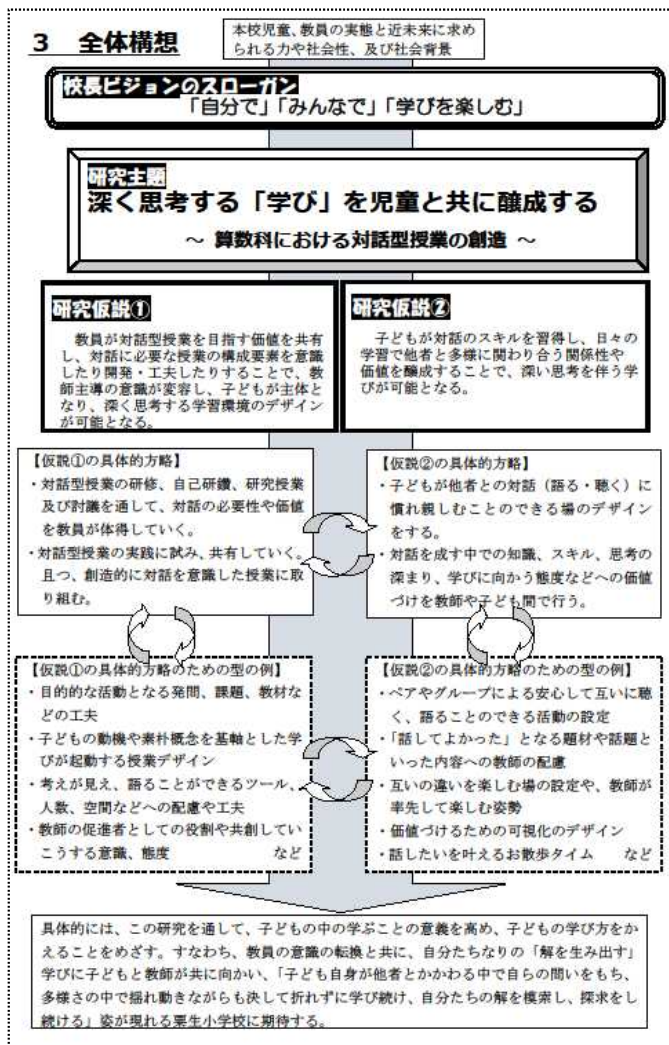
これに至る背景は、教師自身の「教師主導を進める意識の強さ」と、「子ども一人ひとりがノートに向かい、答えを導くということへの意欲は見られるが、吟味し深めようとする姿が希薄である」という本校の課題であり、今後も重点的な改善を目指した継続的な視座として、考え方を踏襲する。

これにより、昨年度は子どもが深く思考することを目指し、右の資料（昨年度研究紀要より）のように研究仮説を2つ設定した。

この2つの研究仮説の目的は大きく2つであり、一つは教員自身が対話型授業や対話の要件を吟味・熟考する中で子どもの主体とは何かについて考えを再構成していくことを目指すものである。もう一つは、子ども自身を学ぶ

ということの価値やそのための他者の必要性の実感を促し、真に自分から学ぼうとする学びへの態度を醸成していくことで、学びの文化を子ども自身が構築することを目指すものである。

右の図は、その両輪が相互補間的であることを示している。つまり、片方の高まりはもう片方を高次の見方や考え方へと誘い、その効果を味わうことを通して、「子ども自身が他者とかかわる中で自らの問いをもち、多様さの中で揺れ動きながらも決して折れずに学び続け、自分たちの解を模索し、探求をし続ける」というめざす児童の姿、そして、そのプロセスにおける学びを意図的に展開する教師の姿への変容や再構築を目指してきたとのだといえる。



(2) 昨年度の研究より紡がれる本年度の課題

昨年度末、その一年を振り返る中、教師のもつ教育観や本校教員に合った次の一步とは何かを議論し、以下の申し送り①～④を吟味した。

① 正答主義の学習観、IRE連鎖による授業の根強さ

深く考えさせたい思いと共に、昨年度は「浅い思考」にも着目し、クラスの状況を省みた。そこでは、答えを述べられる子どもだけが活躍する状況であること、教師がほしい回答のための質問をしてわかる子どもが反応し、そこに診断的評価を教師が下すといういわゆるIRE連鎖による学びが見られた。大きな課題は、教師はそれらがわかってもなかなか変えられないものであるということである。しかしながら、成果として、教師が自分の指導を吟味し、問うということの意味や評価する意図などについて学びが拓かれ、目指したい教師の姿とは何かを議論の軸に台頭し、共有できたことがあげられる。

② 振り返りや省察の在り様

上記のIRE連鎖は「どう課題をもたせたら、、、」「どう設定したら、、、」という教えたがりが教師であることという意図を包含していると考ええる。故に、「子どもが学びの軸に」というきれいな言葉は使いたいが、実際には教師が「子どもに動機を付けられる」と思い、「掌の上で子どもを転がす」ための手法の学びに走りがちになる。そのような中、振り返るということを行為にしてしまい、教師のタイミングで無理やり子どもの学ぶ文脈に落とし込もうとしていないか、というのが②の視点である。この視点を共有できたのが、昨年度の成果である。

本来の振り返りや省察とは、自己調整的な学びへの重要な位置づけであろう。振り返りや省察が適切に子どもの学びに位置づき、活かされるとき、子どもが学ぶということの価値を大きく実感できるはずである。このような自己調整の立場から、価値や意味のある振り返りとは何かに着目するに至った。

③ 子どもの意欲「～たい」に向けた生活と往還する課題

目標に向かって段階的に頑張ることで到達するという「修練作業」の学習観の根強さを議論した。本校では、「練習しなければならないと思わせる子ほど、その目は淀み、下を向く」。それでは「なかなか言葉にできない子は、言葉の修練が積み重ねられずと学びは楽しくない」ことになるため、教員は修練させようとしてしまう現実が見られた。ここから、『技能習得の積み重ね（段階的発達観）が教授法』とする学び観の拡張の必要性が示された。

一つの視点として教員が共有したのは、学びをもっと必要性のあるものにした意欲的になれる課題や活動から子ども自身が学びを実感することで、そのような中で「伝えたい」「知りたい」「一緒に考えたい」を誘発し、自ずとその目的のための言語の獲得へのやる気、やりがいをもつというものである。このような必要性のある学びとは、例えば「楽しさ」「やりがい」を起源とした課題のもとで生み出されると考え、そのために『生活』というものに着目し、生活と往還できる課題の開発が今後の課題としてあげられた。

④ 子どもの対話に不可欠な「見取り」

対話型授業とは何か、どのようにするのか、といった方法、技法といった型を求め、対話型授業として見えるゴールの話が話題に上がった。これを受けての研究の一端の結末は、「対話を型とするのは今ではない」ということが導かれた。それは、対話は、その子どもが真に学ぼうとする状況や文脈、学習環境の中で、自己調整として自分以外の他者に問いかけたり、他者に働きかけたりすることが互恵的と捉えた先に、表現に対して承認の拍手ではなく問い

や批判的意見として現れたり、それを求めて表現しようとしたりする。深める内容が何かによって、そして、何がその人や集団を掻き立てるのかなどといった様々な要件や背景がかかわるのであり、一つのやり取りだけぬきとって表すのは不可能であるからである。

しかし、このような視点による話し合いは、大きな見方をもたらした。それは、型を求める姿とは、言い換えれば、今のままでは対話の質を高める効果的な教師の介入が見えていないということである。そして、そのような効果的な介入のためには適切な「見取り」「鑑識」が必要というものである。

今ある子どもの姿（身体の動きや発言などの表出全般を指す）や状況（黒板の色、配置や使うツール、解釈できる場全般を指す）に隠れた子どもの学びの輝きに目をやり、それを引き出し、紡ぎ合わせるのが対話となる。今の自分たちは何を見取り、どのように介入しているのかを見直していくことも課題といえると考えた。

（３）課題を踏まえた研究仮説や具体的方略

これら本校の課題から、以下のような研究仮説を設定し、具体的な方略を述べる。

【研究仮説 1】

教員が、対話の質を高めるために見取りによる支援的介入をすることで、IRE 連鎖※₁による学びから、子ども主体の対話的な学びへと変換を図ることで、深く思考する学びが可能になる。

※1) IRE 連鎖とは、教師による連鎖の開始(Initiation:I)、子どもによる応答(Reply:R)、教師による診断的評価(Evaluation:E)という順序で展開される教室の相互行為連鎖のことである。

具体的な方略

教師は知識や効率的な解決策を提示するのではなく、子どもが持つ経験値や知識、感情を尊重し、寄り添うような見取りをする。また、正誤ではなく、友達の見方や考え方のよさを問いながら対話のファシリテートをする。

【研究仮説 2】

子どもが、生活の中の事象から課題を見出したり、ふり返りの中で自己調整をしたりしながら学びの発展性や生活の中での活用を考えることで、学びと生活との往還がなされ、子ども主体の学びが可能となる。

具体的な方略

教材研究を通し、はたらかせたい算数的な見方や考え方が子どもの生活とどのように関係しているかを見出し、子どもの「～たい」を引き出す課題づくりを実践する。文章によるふり返りだけではなく、ICTを活用した視覚的に共有可能なふり返りを研究・開発する。単元末のふり返りにおいては、学びの発展性や今後の生活での活用も表現する。

3 全体構想

本校児童、教員の実態と近未来に求められる力や社会性、及び社会背景

校長ビジョンのスローガン

「自分から」「みんなで」「学びを楽しむ」

研究主題

深く思考する「学び」を児童と共に醸成するⅡ

～ 算数科における対話型授業の創造 ～

研究仮説①

教員が、対話の質を高めるために見取りによる支援的介入をすることで、IRE連鎖による学びから、子ども主体の対話的な学びへと変換を図ることで、深く思考する学びが可能になる。

【仮説①の具体的方略】

- ・子どもが自ら友達の知識をアセスメント（客観的評価・分析）し、価値づけるための問い返しを工夫する。
- ・子ども自身が自分と友達の考えを比較し、関連性や相違性を思考できるようにファシリテートをする。

【仮説①の具体的方略のための型の例】

- ・ $T \Leftrightarrow C$ ではなく、 $T \rightarrow C \Leftrightarrow C$ となるような問い返しの工夫
- ・ 正誤や認知のみでなく、子どもの情意にふれる見取り
- ・ 考えが見え、語るができるツール、人数、空間などへの配慮や工夫
- ・ 教師のファシリテーターとしての役割や共創していこうする意識、態度 など

研究仮説②

子どもが、生活の中の事象から課題を見出したり、ふり返りの中で自己調整をしたりしながら学びの発展性や生活の中での活用を考えることで、学びと生活との往還がなされ、子ども主体の学びが可能となる。

【仮説②の具体的方略】

- ・ 算数的な見方や考え方が子どもの生活とどのように関係しているかを見出し、子どもの「～たい」を引き出す課題づくりを実践する。
- ・ ICTを活用した視覚的に共有可能なふり返りを研究・開発する。

【仮説②の具体的方略のための型の例】

- ・ 学びと生活が往還するような課題及び学びの活用の工夫
- ・ 自己調整を可能にする、ふり返りシステムの習慣化
- ・ 学んだことを「使える」が実感できる他教科での環境デザイン
- ・ 学びの発展性、活用を発表する場 など

具体的には、この研究を通して、子どもの中の学ぶことの意義を高め、子どもの学び方を変えることをめざす。すなわち、教員の意識の転換と共に、自分たちなりの「解を生み出す」学びに子どもと教師が共に向かい、「子ども自身が他者とかかわる中で自らの問いをもち、多様さの中で揺れ動きながらも決して折れずに学び続け、自分たちの解を模索し、探求をし続ける」姿が現れる粟生小学校に期待する。

4 研究内容

(1) 授業研究

本年度は対話のスキルや価値の醸成を日々の授業で行う。これらの対話スキルの獲得、または涵養を念頭に、研究授業では、算数科の学習を通して、仮説1と仮説2に基づいた対話型授業の創造に取り組む。

(2) 授業研究の視点（研究の重点）

視点1 子ども自身が自らの問いをもてたか

視点2 対話の中で揺れ動きながらも決して折れずに学び続けようとしているか

視点3 自分たちの解を模索し、探求をし続けているか

(3) 検証の方法

- ・授業参観シートでの評価、授業整理会での意見交流
- ・授業の中での児童の姿・行動（観察・ノート・成果物）
- ・児童・教員に向けたアンケートでの意識調査

(4) 他の部会との関連事項

研究部（学習支援）

① 必要に応じた学習ツールの活用

- ・ノートやタブレット端末による学習のふり返りの共通理解・共通実践
- ・学年や教科に応じたノートの書き方・使い方指導
- ・自分の考えを表現する活動と効果的なフィードバック

② あおっこタイム・チャレンジタイムの充実

- ・基礎基本の定着，活用力，表現力，非認知スキルの育成
- ・新たな単元に入る前のレディネスの確認（AIドリルの活用）
- ・能美っ子チャレンジプリントや評価問題の活用

③ 学習の環境づくり

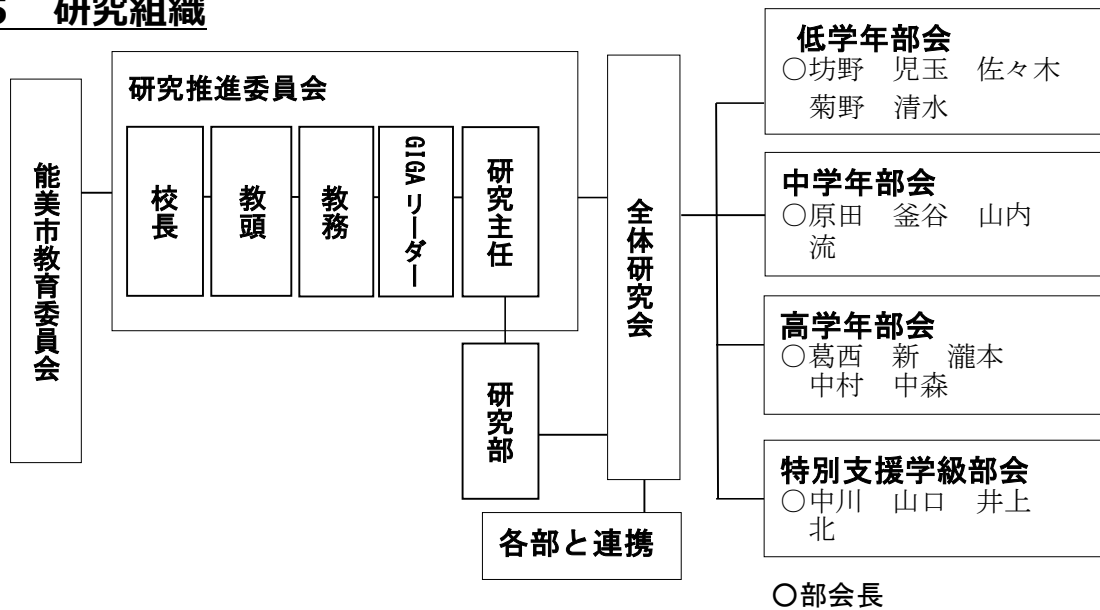
- ・学習に向かうための落ち着いた環境づくり，学習環境の整備
- ・学びの跡が見え，児童が既習を活用できる学習掲示の作成

生徒指導部

あたたかい学習集団づくり

- ・よりよい集団をめざした目的的な学級集団づくり
- ・生徒指導の4つの視点を意識した指導の工夫

5 研究組織



(1) 研究推進委員会

- ・研究のねらいや方針、取り組み方について企画提案し、全体研究会で共通理解を図りながら研究を推進する。
- ・教師の指導力向上のための研修会を企画する。
- ・地域・保護者などに取組を発信する。
- ・児童の実態・保護者の思いなどを把握し、研究成果や課題を捉え、活かす。

(2) 研究全体会

- ・研究のねらいや方針、取り組み方について協議し共通理解を図る。
- ・研修会、研究授業、授業交流などを通して職員全体の理解を深め、授業力、指導力を高める。

(3) 低・中・高学年部会

- ・指導計画に基づき、授業実践を行い、実践交流をする。
- ・各学年部会で1本、研究授業について教材研究を行い、指導計画、指導案を作成し、全体研究会に提案、実践、まとめを行う。
- ・授業や活動の記録などを保存し、検証や今後の研究の手立てとする。

6 取り組みの年間計画

※校内研究会は各月の第2.4週の水曜日開催予定（中止時は連絡）

月	日	研究会	内容	その他
4	16	校内研修会①	本年度研究の方針確認 IRE連鎖とこれからの教育観についての研修会	
5		校内研修会②	算数科における対話型授業の研修	
	24	校内研修会③	提案授業、研修会	講師：石田先生
6		校内研修会④	事例型検討会（対話の素地としての学級づくり）	
7		校内研修会⑤	実践交流、具体的取り組みの確認	講師：未定
8		校内研修会⑥	研究授業の目的と内容の共有及び指導案作成	
10		研究授業① （学年）	対話型授業の具体的実践における思考の深まり の具体的検証・討議会	講師：未定
11		研究発表② （学年）	対話型授業の具体的実践における思考の深まり の具体的検証・討議会	講師：未定
		計画訪問		日程未定
12		研究授業③ （学年）	対話型授業の具体的実践における思考の深まり の具体的検証・討議会	講師：未定
1		校内研修会⑦	本年度の実践の成果と課題のまとめ	
		校内研修会⑧	他校の対話的授業実践の報告	
2		校内研修会⑨	次年度の方角性の確認	
3				